

丹波佐吉の新発見狛犬 — 醍醐・春日神社

磯辺ゆう¹⁾、小寺慶昭²⁾

1) 奈良文化女子短期大学、2) 龍谷大学・文学部

The newly known stone komainu made by Sakichi of Tanba : Daigo-Kasuga

Yu Isobe¹⁾, Yoshiaki Kotera²⁾

1) *Narabunka Women's College* 2) *Faculty of Letters, Ryukoku University*

概 要

幕末期の名人石工丹波佐吉の新たに発見された狛犬を記載し、その全体の様式、石材等について検討する。問題となる特徴を、全ての佐吉狛犬について検討し、今回の新発見狛犬の制作状況について考察する。

はじめに

江戸時代、石造狛犬が神社境内に盛んに奉納されるようになり、畿内では大坂を中心にして周辺に奉納文化が広がっていった¹⁾。そして幕末にいたって、丹波佐吉という名人を生んだ。丹波佐吉の狛犬は、リアルな中にも精緻かつ洗練があり、他と一線を画している。石工の人物像については、多くの場合何も記録が残らないが、丹波佐吉は幸い比較的多くの記録や伝承が残されており、その生涯と制作姿勢や制作状況についての考察もされるに至っている^{2)、3)、4)}。

今回新たに佐吉狛犬を発見したことにより、その奉納年月から制作状況について再考する必要性が生じた。狛犬を記載すると同時に、既知の全佐吉狛犬とあわせて特徴を比較検討し、この狛犬の制作状況について、考察した。狛犬番号は混乱しないように磯辺⁵⁾による番号の続きS17とし、奉納年月からその前後の狛犬番号を(S5-S6)として付け加えた。基本的な方法は磯辺^{3)、5)}と同じである。ここでは前に取り扱わなかった石材、州浜のデザイン、「奉献」を記す石(台座)、それらを支える基壇について、いくつかの型に分け、全体のデザインの変遷を検討した。

記 載

S17 (S5-S6) 醍醐・春日神社 (安政三1856丙辰歳十一月吉日、作師照信花押、阿吽とも：氏子、

阿：世話人森村庄三良、平井種八、音羽久次良、吽：森川喜八郎、森村政右エ門、吉井九兵衛）
 新。奈良県橿原市醍醐町養国寺隣接。

中型。体長/体高低め。体高/胸幅低めですんぐりしている。胸よりも頭部が前に出ている。阿吽とも斜めこちら向き。州浜四方から足が見える。州浜の粹線下辺に無く、三辺のみ。耳の毛短く流れる（目じり付近まで）。目と鼻先やや長め。顎鬚短。犬歯2対。尾：ヤツデの葉型、阿吽同形、上向き直毛束3、横の渦左右各5（尾の前面2、後面3）。尾の付け根：貫通せず。後足後方に向かって毛が流れ、後方の渦なし。後ろ足間の股の窪め仕上げ良好。肩の傾き、体のひねり明瞭。台座：1石、基壇：四角柱の石を2石並べたもの。狛犬：砂岩、台座・基壇：花崗岩。

阿：雄。鬣前流れ。背骨の菊紋5、胸菊紋1。左肩下がり、後ろにひく、右肩前へ出る。

吽：雌雄なし。角あり。鬣後ろ流れ。背骨の菊紋2、胸菊紋1。左肩やや下がり。



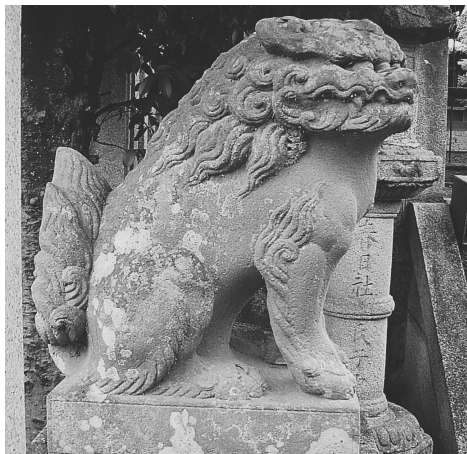
阿-①



阿-②



阿-③



吽-①



吽-②



吽-③

図1、S17 (S5-S6) 醍醐・春日神社狛犬

考 察

佐吉の署名である「照信花押」があり、狛犬そのもの（図1）も「奉献」他の文字（図2）も確かに

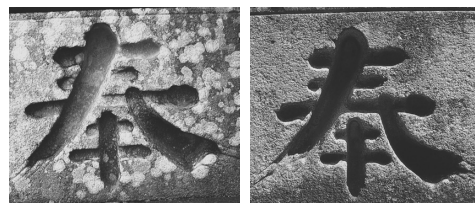
佐吉の特徴を示している。奉献時期は、同じ榎原市S5久米御縣と斑鳩町S6興留・素戔鳴尊の間である。以下にいくつかの特徴について、他の佐吉狛犬と比較する。

1、狛犬の主な特徴

狛犬のサイズは、S5久米御縣、S6興留・素戔鳴尊に非常に近い(表1)。尾の縦横比からみると、やや縦長なS5久米御縣よりも丸い形で、S6興留・素戔鳴尊に近いが、表2に示されている狛犬の主な特徴ではS5久米御縣に一致する。また体のひねりは、明瞭になってきたS3、S4までは阿咩とも拝観者側の肩が下がって後ろに引くという形をしている⁵⁾。それに対し、S5久米御縣では阿：手前側、咩：向



S17 (S5-S6) 醍醐・春日



S5 久米御縣 S6 興留・素戔鳴尊

図2、「奉献」「氏子」文字

こう側(ともに左肩)が下がって後ろにひきながら、頭は手前側を向くという体勢になっている。S17(S5-S6)醍醐・春日は、このS5久米御縣に同じである。ただし、S5久米御縣では、重心を向こう側に置くという複雑さであるが、S17(S5-S6)醍醐・春日ではほぼ直立である。またS5久米御縣が、佐吉にとって最初に氏子中による奉献であった³⁾のに続いて、このS17(S5-S6)醍醐・春日でもやはり氏子による奉献となっている。

表1、狛犬の大きさ(阿像 単位cm)

期	狛犬番号と神社		狛犬						尾	
			全長	体長	体高	胸幅	体高/体長	体高/胸幅	縦	縦/横
第I期	S1	平井・八王子神社	37	30	46	21	1.5	2.2	27	1.5
第II期	S2	丹生川上神社	63	54	65	33	1.2	2.0	53	1.6
	S3	神楽岡神社	74	66	76	35	1.2	2.2	47	1.5
	S4	宇太水分神社	80	64	81	40	1.3	2.0	54	1.3
	S5	久米御縣神社	70	53	72	35	1.4	2.1	51	1.7
	S17(S5-S6)	醍醐・春日神社	70	56	71	34	1.3	2.1	46	1.3
第III期	S6	興留・素戔鳴尊神社	72	62	83	34	1.3	2.4	55	1.2
	S7	藤森・十二社	66	60	69	28	1.1	2.5	47	1.5
	S8	伴堂・築杵神社	73	69	93	36	1.4	2.6	65	1.8
	S9	下永・八幡神社	75	65	89	38	1.4	2.4	58	1.5
	S10	永原・御霊神社	64	59	75	31	1.3	2.4	64	2.7
第IV期	S11	柏原・八幡神社	64	52	71	30	1.4	2.4	33	0.8
	S12	沢・白山神社	64	52	64	30	1.2	2.1	42	1.3
	S13	兵主神社	75	69	85	35	1.2	2.4	56	1.4
	S14	神岳神社	60	54	65	31	1.2	2.1	44	1.3
第V期	S15	阿波神社	52	44	60	25	1.4	2.3	35	1.1
	S16	摩気神社	73	62	73	32	1.2	2.3	45	1.6
その他	U	牟佐坐神社	77	69	87	38	1.3	2.3	70	1.7
	K	三井神社	63	57	69	34	1.2	2.1	45	1.4

注1、全長：鼻から尾の後端まで、体長：鼻から胴または後足の後端まで、体高：前脚下端から頭上端まで、胸幅：胸の最大幅。

注2、S7とS13は平成に再建されたもの。

注3、磯辺⁵⁾表1にS17(S5-S6)を付けくわえ、一部改変。「その他」は佐吉以外の石工による。

鬣の流れ方向について、佐吉は様々に工夫している（表2）。初めのS1平井・八王子からS3神楽岡までは阿吽ともに前に流れている。次いで、S4宇太水分以降S6興留・素戔鳴尊までは阿吽で異なる方向に流れており、S6興留・素戔鳴尊を除いて制作順にその方向が逆になっている。S17（S5-S6）醍醐・春日もその順番に従っていることが分かる。佐吉の狛犬としては最初の頂点に達したS6興留・素戔鳴尊の後、鬣はS10永原・御霊まで阿吽ともに後ろへ流れる（前の論文磯辺⁵⁾では下向きとしたが、全体の統一を取って、ここでは後ろ向きとする。首が長い場合下向きに見える）。阿吽ともに後ろに流れる毛流れは、新たな狛犬像を模索する中で参考にしたと思われる近畿・中国両地方日本海側に多く分布する八重垣狛犬^{1)、6)}と同じである。それは既にS7藤森・十二社で始まっていることが表2から伺える。その後、形態上画期的で、佐吉の気持ちの上でも重要であったに違いないS11柏原・八幡とS16摩気が阿吽ともに前流れである以外は、後向きか、前後両方かのどちらかとなる。

このようにS17（S5-S6）醍醐・春日の狛犬そのものは確実に第Ⅱ期の特徴を備え、全体として直前のS5久米御懸にならった形である。

表2、佐吉狛犬の特徴

狛犬番号	期	尾	体高	体高/胸幅	顔向き	目鼻間	顎鬚	鬣流れ方向		耳	胸のすじ	犬歯	胸紋	背骨紋	後足後方渦	
								阿	吽							
S1	I	扇	46	2.2	斜め こち ら 向 き	長		前	前	平	無	1	無			
S2			65	2.0				前	前							阿
S3			77	2.2				前	前							
S4	II	ヤッ デ	81	2.0		中	短	前	後	有	2	吽	菊	0		
S5			72	2.1				後	前							
S17(S5-S6)			71	2.1				後	前							
S6			83	2.4				前	後							
S7	III	炎 流 れ 毛	69	2.5		短	長	後	後	流れ	無	1	無	菊	1	
S8			93	2.6				後	後							菊
S9			89	2.4				後	後							
S10			75	2.4				後	後							丸
S11			71	2.4				前	前							
S12	IV	ヤッ デ	65	2.2		中		後	後	流れ	1	菊	?	0		
S13			85	2.4				前	後						平	
S14			65	2.1				後	後							流れ
S15			60	2.3				前	後						有	
S16	V	扇	73	2.7	阿吽正対	長	前	前	平	有	2	無	?	菊		0

注1 S7、S13は平成に再建されたもの。

注2 S8の背、脚等に多数の菊紋があるが、胸にはない。

注3 磯辺³⁾表1にS17（S5-S6）及び鬣流れ方向を付加。各特徴の詳細は本文及び磯辺³⁾を参照。

注4 ?は平成作には無いが元来は疑問。

2、「奉献」の彫り

「奉献」と「氏子」の文字は佐吉の特徴を示している（図2、磯辺⁵⁾参照）。しかし、その彫り方は、エッジが甘いことが、すぐ前のS5久米御懸と直後のS6興留・素戔鳴尊と比べて明らかである。さらに「奉」の縦の長さとの彫りの深さ（主として右払いの最も深い部分）の関係から、S17（S5-S6）醍醐・春日の彫りが、第Ⅱ、Ⅲ期の中ではかなり浅く、佐吉の第Ⅰ、Ⅳ期および他の石工による彫りと

同列であることがわかる（図3）。第I期の狛犬は佐吉の最初の狛犬であり、全体に小さくこの文字も小さい。用いている石も目の粗いものである。最初はまだそれ程深く彫らなかつたとみられる。一方第IV期では、S12沢・白山とS14神岳は地元の石工が彫ったと考えられ、そのために彫りが浅い³⁾、⁵⁾。S13兵主の場合、彫りが浅いのはその字体が他と異なるからかもしれない。さらに言えば、以前のような深い彫りを見せなくてもよい字体を選んだとも考えられる。一方、第V期は、州浜に彫られているので文字が小さく別格と見なければならぬ。このように始めと終わりに浅い彫りが見られるのは、パワーと熟練の両方をあわせた力の問題であって、不思議ではない。

一方、力が充実していたと考えられる第II、III期の中で、最初のS2丹生川上（阿）は比較的浅いが、昨ではもっと深く彫られている³⁾。そして、S17（S5-S6）醍醐・春日直前のS5久米御縣も、直後のS6興留・素戔鳴尊とともに、彫りがきわめて深く鮮やかである（図2）。「奉」の文字の最上辺と台座石の上辺との間の距離は、S5久米御縣とS17（S5-S6）醍醐・春日はともに1.8cmであるが、「奉」左はらい上部の深さはS5久米御縣8cm、S17（S5-S6）醍醐・春日4.5cmと大きく異なる。石の種類をみると、S5久米御縣では宇陀の特徴ある赤い石を使っており、S17（S5-S6）醍醐・春日では花崗岩である（表3）。花崗岩は堅いが、この彫りの違いは石の違いによるわけではない。佐吉は次のS6興留・素戔鳴尊で、花崗岩に鮮やかな「奉献」を彫っている。

つまり、力が十分であったと考えられる頃に、特に浅い彫り、甘いエッジを見せているのが、S17（S5-S6）醍醐・春日なのである。これは他の石工の手になる可能性を考えても良いだろう。

3、州浜の形と枠線

本来のものが失われているS7藤森・十二社とS13兵主を除いて、佐吉の州浜には全て脚がある。その脚が四方向から見える（図4C、D）場合が、ほとんどである（表3）。初期のS1平井・八王子、S2丹生川上と最後のS16摩気だけは、前後の方向から脚が見えない（図4A、B）。前の記載⁵⁾で、S2丹生川上を含む第II期の特徴として、「州浜の脚が四方向から見える」としたが、S2丹生川上に関してここに訂正する。

州浜の側面に、細い枠線を入れるのも佐吉の特徴である。S17（S5-S6）醍醐・春日を含まないS3神楽岡からS15阿波までに、完全な四角い枠が入っている（図4C）。不明の二つの中で、S13兵主にも同様な枠があった⁷⁾。

枠の形が四角でないのは、脚が前後の方向から見えない最初と最後のグループとS17（S5-S6）醍醐・春日である。最初のS1平井・八王子では、州浜の四隅に縦に筋が入り、側面の下辺に横線が入

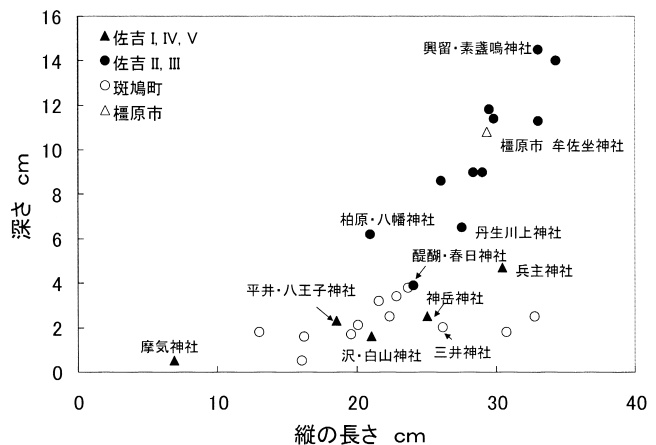


図3、「奉」の縦の長さに対する彫りの深さ（阿）磯辺³⁾ 図1に追加。

る（図4 A）。佐吉狛犬ではほかに見られない形である。S 2 丹生川上では、デザインを改め、前後面に下辺だけ線の無い三方の枠線、側面に同様の三方の線に加えて、下に独立した線を入れている。次のS 3 神楽岡で、脚が完全になると同時に枠線は四角になって、以後ほとんどに用いられる安定したデザインとなった（表3）。中には、模様のある州浜もある。S 8 伴堂・杵築では、四角の枠に加えて四面に模様が彫られ、脚は他よりもやや高い（図5）。これらは、当時佐吉が新たな狛犬のために取り入れようとしていた八重垣狛犬の特徴である⁵⁾。最後のS16摩気では、B型にもどり、前後面だけに模様がある（図5）。これは州浜側面に「奉納」を入れるためである。このように州浜のデザインを模索している最初と、特に理由のある最後の場合に、枠線の特殊な例がみられるわけである。

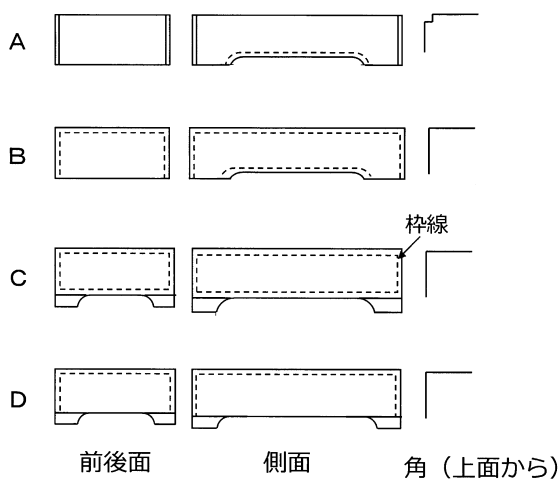
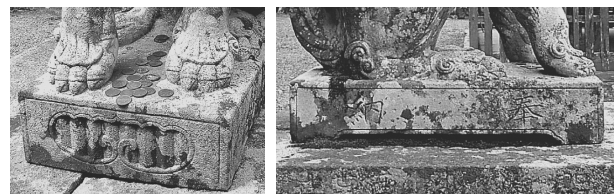


図4、州浜模式図
足の内側曲線部分に沿って枠線がある場合、省略した。



S 8 伴堂・杵築



S16 摩気

図5、州浜の模様（左：前面、右：側面）

佐吉にとって最も多い安定したデザインの州浜の時代に、枠線が四角でないのはS17（S 5－S 6）醍醐・春日のみである。この線が1本少ない特徴（図4 D）を作業の点から眺めると、四角にするよりも作業量は少ないとみることができる。

4、全体の形と州浜以外の枠線

狛犬が設置されている土台の形にも佐吉の工夫が現れている。土台全体の形は図6に示すとおりである。狛犬のすぐ下にある通常「奉献」、奉納年月日、寄進者、世話人などを彫っている部分を台座、さらにそれを支えている下の台を基壇と呼ぶことにする。台座には、情報が彫りこまれている大きな石の上下に平たい段を加えている場合がある（図6 X、X'）。また基壇の上部に平たい段が加わっている場合もある（図6 b、d）。基壇の下にさらに石が敷かれている場合があるが、これはコンクリートのこともあり、設置場所を平らに安定化させるためのものとして、ここには含めない。台座には枠線（図6）がある場合とない場合があり、ある場合は上面にもある。

まず上下に平たい石を持った台座は、佐吉初期のS 1 平井・八王子からS 4 宇太水分まで認められる（表3）。その中でS 1 平井・八王子とS 2 丹生川上の台座下部石 x 2は上部の x 1よりやや大きく、基

壇上部石 b1 的な要素をもっている。その下は、S 1 平井・八王子の場合傾斜地に設置された台形の基壇（図 6 a、図 7）で、S 2 丹生川上（図 7）ではほとんど見えない土台があるだけである。この土台は安定化用の上記省略部分にあたる。S 2 丹生川上の設置場所は急な階段状になっており、高い段に設置されている関係上、基壇を築く必要が無かったのであろう。S 3 神楽岡、S 4 宇太水分では X' b 型で最も複雑な形である。台座本体は四隅が柱のように出ている形に彫られている（図 7）。この柱部分にも上下の平たい石（x1、x2）にも、さらに x1 上面にも枳線が入っていて、非常に手が込んでいる（図 6）。この型の x2 は x1 と同形同大で、b1 との区別は明瞭である。

S 5 久米御縣以降すべて、台座はシンプルな Y 型か Z 型になる（図 6、表 3）。Z 型（S11 柏原・八幡）（図 7）は、設置場所の広さから、台座 Y に追加の石を加えたものとみなせるので、基本的に Y 型と同等である。台座 Y に枳線が 4 例認められる（表 3）が、こ

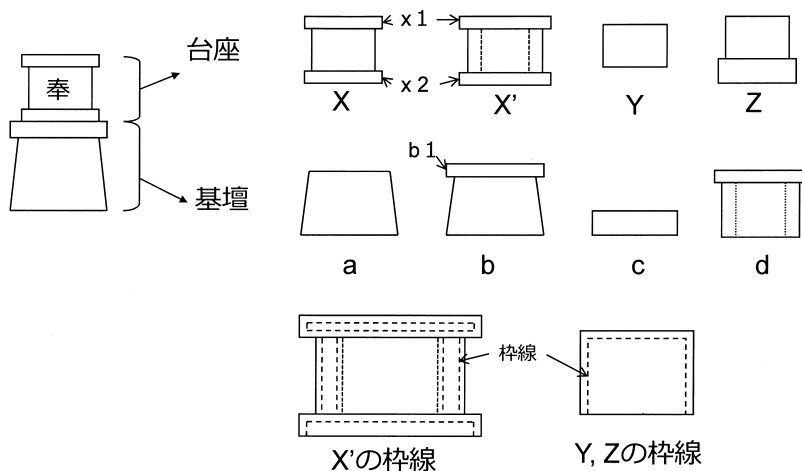


図 6、台座・基壇模式図

表 3、佐吉狛犬及び参考狛犬の州浜、台座、基壇の特徴

狛犬番号	期	州浜		台座		基壇		石材		
		型	模様	型	枳線	型	作者	狛犬・州浜	台座	基壇
S 1	I	A	4 面模様つき	X	—	a	龍田石工	土地の石	土地の石	土地の石
S 2		B		X	—	—		赤石	赤石	赤石
S 3	C	C		X'	◎	b		赤石	赤石	赤石
S 4		C		X'	◎	b		赤石	赤石	赤石
S 5	II	C		Y	○	b		赤石	赤石	赤石
S17(S5-S6)		D		Y	—	c1		砂岩	花崗岩	花崗岩
S 6	C	Y		—	c2	龍田石工		砂岩	花崗岩	花崗岩
S 7	不明	Y		—	b	砂岩		花崗岩	花崗岩	
S 8	III	C		Y	○	b		砂岩	花崗岩	花崗岩
S 9		C		Y	—	b		砂岩	花崗岩	花崗岩
S 10		C		Y	—	b		砂岩	花崗岩	花崗岩
S 11		C		Z	○	b		柏原石工	砂岩	砂岩
S 12	IV	C		Y	—	d		他	砂岩	花崗岩
S 13		不明	Y	○	b	他	砂岩	花崗岩	花崗岩	
S 14		C	Y	—	d	他	砂岩	花崗岩	花崗岩	
S 15		C	Y	—	b	他	砂岩	砂岩	花崗岩	
S 16	V	B	前後模様つき	Y	—	a	土地の石	土地の石	土地の石	
U	足つき	側面模様つき	Y	—	c1	他	砂岩	花崗岩	花崗岩	
K	足なし	側面模様つき	Y	—	c2	他	砂岩	花崗岩	花崗岩	

注 1 州浜の型は図 4 参照。

注 2 台座・基壇の型は図 6 参照。

注 3 枳線は図 6 参照、○：あり、◎：多くあり、—：なし。

注 4 c1、c2 の数字は段数。



S 1 平井・八王子



S 2 丹生川上



S 3 神楽岡



S 5 久米御懸



S17 (S 5 - 6) 醍醐・春日



S 6 興留・素戔鳴尊



S11 柏原・八幡



S14 神岳



S16 摩気

図7、狛犬・台座・基壇の全体像（代表例）

の枠線は佐吉独特のものではなく、例えば神楽岡神社からも近い大宇陀地区の春日神社参道の狛犬（天保十二年1841）の台座にも見られる。

これらの基壇は多くがb型であるが、狛犬第Ⅳ期とⅤ期では基壇の形にd型やa型が混じってくる（表3）。基壇d型は台座X'型同様に四隅が柱のように出ている形（図7、S14神岳）であるが、「奉献」の彫りから、基壇d型をもつS12沢白山、S14神岳ともに佐吉以外の手になると考えられる³⁾。このタイプは両神社近くの王寺町久度神社狛犬（弘化二年1845）にもみられ、興味深い。第Ⅴ期のS16摩気は、州浜に「奉納」と刻まれ、基壇も形は台形であるが丸い石積みである点で他とは全く異なっている（図7）。この丸石は周辺の自然石を使っており、石を磨かずに積んだものである。狛犬は佐吉の最後のものとみられ³⁾、それ自体独自の境地に達している。恐らく狛犬を作ることに全精力を費やし、基壇を磨いて作る余力がなかったのであろう。この基壇は、地元の氏子の人々の手助けを得て、築かれたものとみることができる。台座に大きな奉献を刻まなかったのも、力強い文字を彫る力がなかったのではないだろうか。

このような後期の事情とは異なって、力が最も充実していたに違いない第Ⅱ期後半S5久米御縣以降第Ⅲ期終りまで、台座・基壇はYb型が中心である。それは、S5久米御縣に見られるように端正な姿である（図7）。その中で、S17（S5-S6）醍醐・春日とS5興留・素戔鳴尊は大きく異なり、四角い石を組んだだけの基壇である（図7）。これは佐吉以外の狛犬の基壇としては最も多い単純な形で、S5興留・素戔鳴尊の基壇も、龍田石工九兵衛の手になっている⁵⁾。こうしてみると、佐吉の安定期の基壇のデザインは、台形で上に平たい石があるb型で、S17（S5-S6）醍醐・春日の基壇は、その単純な形から他の石工の手になるものと考えて良い。

また、第Ⅳ期S13兵主は、「奉献」の字体が通常の佐吉の字体と異なっているが、台座に枠線があり、基壇が台形で仕上げがすっきりと美しいことなどから、この台座と基壇は佐吉のものともみてもよいのではないだろうか。

5、石材

S1平井・八王子からS5久米御縣までと最後のS16摩気では、狛犬から一番下の基壇に至るまで、すべて同じ石でできている（表3）。S1平井・八王子は、目の粗い石である。S2丹生川上からS5久米御縣までは赤い石である。

このころ佐吉とその弟子達は大師山の石仏を作るために宇陀平井の山中にいた^{2)、4)}。石仏のために使ったのは、地元のカラト石と阿蘇石が多いといわれている²⁾。カラト石は、大師山東の内牧付近で採れる石であり、阿蘇石は大師山すぐ南東の山中の阿蘇で採れる石である。阿蘇山中には小さな滝があり、佐吉は毎日そこでみそぎをしてから仕事にかかったという伝承がある²⁾。上記の狛犬に使われている二種類の石はこれらの石であろう。

「菟田野町史」⁸⁾によれば、阿蘇の山中には阿蘇神社が鎮座し、そのそばの阿蘇滝と呼ばれる水こり場は、旱天時に雨を祈祷する行場である。阿蘇神社の神体は石塊で、阿蘇大明神・水分大明神・金刀毘羅大明神と墨書されているという。さらに「大和菟田野の民俗」⁹⁾によると、アソ明神のご神体は赤石であるとのことである。まさしくこの阿蘇の赤石が、佐吉の使った赤石に違いない。また大宇陀の町の

中の神社には現在も赤い石製の石造物がよく見かけられる。この地方の石が赤いのは、朱（硫化水銀HgS）を含むからである。このあたりは古代の水銀の産地まっただ中で、山を西に下った大澤では明治以降昭和に至るまで水銀鉱山が稼働していた⁸⁾、¹⁰⁾、¹¹⁾。阿蘇神社で赤石がご神体になるのは、含まれている朱のために違いない。佐吉はS 2丹生川上からS 5久米御縣までこの赤石を使っている。S 4宇太水分について、金森氏²⁾は、石を泉州でとれる和泉石（砂岩）の最高級品としているが、間違いなく宇陀地方の赤石である。狛犬の特に吽像の全体が黒くなっているのは、汚れであり、周囲の状況により風雨の当たり方が阿吽像で異っていたのであろう。最初のS 1平井・八王子は異なる石材で、カラト石か手近にある石であろう。ここまでは全て宇陀地方で石を採取し、上から下までほぼ作り上げたものを現地に運んだとみられる。そして最後のS 16摩気では、佐吉は現地にいて現地の石を使ったのである³⁾。

初めと終わりの時期を除く中間のS 17（S 5－S 6）醍醐・春日からS 15阿波まで、佐吉は狛犬を砂岩、基壇を花崗岩で作っている。台座の多くは花崗岩であるが砂岩の時もある。これらの砂岩は当時よく流通していた¹²⁾和泉石と考えられるが、中でもS 6興留・素戔鳴尊とS 11柏原・八幡の石は最高級品である。畿内では近世以降墓石によく和泉石が使われており、石屋のルートで手に入れることができた¹²⁾。花崗岩も同様で、実際この時期佐吉は大坂で多く制作している。

S 17（S 5－S 6）醍醐・春日から、それまでの狛犬と全く異なる石材になったのは、佐吉はこの時宇陀の山を下りたということであろう。神社周辺の石屋に身を寄せて作ったのか、大坂で作ったのかは不明である。なお、この狛犬の阿像にも、S 4宇太水分と同様の黒っぽい汚れがあるが、吽像はきれいである。実は、醍醐町春日神社は、現在地の東北約200mの字堂屋敷にあったのを、いつのときにか現在地に遷座した¹³⁾。やはり阿吽像の周囲の状況が異っていたのであろう。

6、奉納時期と事情

総合すると、佐吉は山を下りてこの狛犬を制作し、州浜を簡略にし、文字は書いて渡したが、台座の彫りも基壇も他の石工の手に任せたと推測される。ここまでの佐吉の制作の仕方からはずれる最初のやり方で、全体として佐吉は急いでいるようにみえる。なぜ急いだのだろうか。

S 17（S 5－S 6）醍醐・春日が奉納されたのは安政三1856年11月で、翌12月に故郷丹波で師匠であり育ての親であった伊助が亡くなっている。その時佐吉は丹波におり、さらに伊助が亡くなるよりも割合早く帰郷していたと推定される⁴⁾。すると11月に大和にいたとは考えにくい。

宇陀で世話になっていた美登路家の末である富太郎さんの証言によると、佐吉は、故郷から病人の知らせがあって、制作途中の観音像をおき“帰ってきたらまたやるわ”と行って去ったとのことである²⁾。佐吉はこの後宇陀に帰ることはなく、この像はついに完成されなかった。おそらく佐吉はこの観音像を誰かの依頼ではなく自分の意志で作り始めていたので、急ぐこともなかったのであろう。こうして山を下り、大急ぎで狛犬にかかったと考えられる。醍醐町春日神社の狛犬は、有力者の世話によって、氏子から奉納されたものである。それを引き受けた時点では問題なく、観音像を作業しながら、狛犬を作る準備をしていたのかもしれない。ところが伊助の病気で故郷に帰らねばならないことになり、大急ぎで完成させる必要にせまられたわけである。11月に奉納することは、おそらく神社境内の整備や建物の修理などに関わって、決まっていたのであろう。いくつかの部分の簡略化し、できるだけのことをすると、

設置に至る残りの作業を誰かに任せて佐吉は急いで丹波に向かったと思われる。

引用文献

- 1) 「大阪狛犬の謎」 小寺慶昭 2003 ナカニシヤ出版.
- 2) 「旅の石工_丹波佐吉の生涯」 金森敦子 1988 法政大学出版局.
- 3) 「丹波佐吉の狛犬2－考察」 磯辺ゆう 2007 奈良文化女子短期大学紀要38：31-42.
- 4) 「丹波佐吉の石造物とその一生」 磯辺ゆう 2008 奈良文化女子短期大学紀要39：1-38.
- 5) 「丹波佐吉の狛犬1－記載」 磯辺ゆう 2007 奈良文化女子短期大学紀要38：19-30.
- 6) 「京都狛犬巡り」 小寺慶昭 1999 ナカニシヤ出版.
- 7) 「狛犬の研究－大阪府の狛犬－」 奈良文化財同好会 1999 奈良文化財同好会.
- 8) 「菟田野町史」 菟田野町史編秀委員会 1968 菟田野町役場.
- 9) 「大和菟田野の民俗」 倉田正邦・松本俊吉・岩井宏實・岸田定雄・乾健治・池田末則 1968 「菟田野の民俗」 刊行会.
- 10) 「丹生の研究－歴史地理学から見た日本の水銀」 松田壽男 1970 早稲田大学出版部.
- 11) 「古代の朱」 松田壽男 2005 ちくま学芸文庫.
- 12) 「墓標の民俗学・考古学」 朽木量 2004 慶應義塾大学出版会.
- 13) 「奈良県史 5 神社」 奈良県史編集委員会 1989 名著出版.

〒631-8523 奈良市中登美ヶ丘3-15-1 奈良文化女子短期大学（磯辺ゆう），〒600-8268 京都市下京区七条大宮大工町 龍谷大学文学部（小寺慶昭）

